

## 『生活の質向上プログラム2020』が示す「公共圏」拡大の兆しと社会的アクターとしての女性

上智大学 総合グローバル学部 准教授 辻上 奈美江

このところサウジアラビアでは、文化・娯楽・スポーツに関する変化が激しい。4月に男女が同席の映画館が開館したことは日本のメディアでも注目されているが、その他にもリヤド郊外の巨大レジャー・リゾート「キッディーヤ」竣工式が開催され、将来ジェッダにオペラハウスを建設する計画も明らかになった。そんな中、5月初旬に『2020年に向けた生活の質向上プログラム』(以下、『生活の質向上プログラム2020』)が発表された。2030年に向けた展望『ビジョン 2030』達成のため、2020年までにサウジ政府が346億ドルかけてサウジの複数の都市を世界レベルに発展させようとする取り組みである。筆者はこれまでも、『ビジョン 2030』の文化・娯楽面の変化にジェンダーの視点から着目してきたが<sup>(1)</sup>、『生活の質向上プログラム2020』が発表されたことで、サウジ政府の描く文化・娯楽分野の方向性と、それらの変革における女性の位置付けが一層明らかになってきたと考えられる。本稿では、まず『生活の質向上プログラム2020』の内容を確認し、この改革ともなって政府主導で拡大される「公共圏」について、サウジ人の居住形態にも着目しながら検討することとする。

### 『生活の質向上プログラム2020』はどう実現するのか

今回発表された『生活の質向上プログラム2020』は、サウジの諸都市を世界的な都市へと成長させることを目標とした、12の「ビジョン実現プログラム」のひとつと位置付けられている。これまでに発表されてきたビジョン関連の資料と比べて、『生活の質向上プログラム2020』は、社会的・文化的規範の変化を伴う目標がより明確に示唆されているように思われる。

まず、これまでの経緯を簡単に振り返ると、2016年4月に発表された『ビジョン 2030』では、「活気ある社会」、「精強な経済」そして「野心的な国家」の3つの柱が掲げられた。このうちの第一の「活気ある社会」において、「イスラームの価値観と国家アイデンティテ

(1) 辻上奈美江「[文化・娯楽・スポーツと女性：変革を迫られるサウジの社会・文化規範](#)」『中東協力センターニュース』41巻12号, pp. 13-21.

イの強化」はもっとも重要な目的と位置付けられている。『ビジョン 2030』のエッセンスをチャートで説明した『サウジビジョン 2030：戦略的目的とビジョン実現プログラム』では、「イスラームの価値観と国家アイデンティティの強化」のために、穏健、寛容、公平、透明性といった価値観を広めること、巡礼（大巡礼および小巡礼）の円滑化などの目標が掲げられている<sup>(2)</sup>。『ビジョン 2030』に次いで、省庁など24の政府機関が達成すべき数値目標を掲げた『国家変革計画2020』においても同様の立場が貫かれている<sup>(3)</sup>。たとえば、文化情報省には、メディア産業の発展に加えて、イスラームの文化遺産や歴史の保存、国家アイデンティティの保持と次世代への継承が課されている。また観光と国家遺跡のための委員会には、宗教施設や遺跡、娯楽関連施設への観光促進のための目標が掲げられている。

ところが今回発表された『生活の質向上プログラム2020』では、これまで重点が置かれてきたイスラームの価値観の強化についてはほとんど言及がない<sup>(4)</sup>。同プログラムは、サウジアラビアの諸都市を住みやすい街に変えていくための計画が中心に据えられているためかもしれないが、宗教関連の施設は各都市の重要な観光スポットとして挙げられているのみで、商業的な目的に沿った観光の促進やスポーツの振興が前面に出ている印象がある。実は、このように疑問視するのは理由がある。ブルームバーグが明らかにしたところによると、当初、マスコミに配布された『生活の質向上プログラム2020』に関する資料では、男女隔離をやめる、礼拝時間の店舗閉鎖もしないといった内容が目立たないように盛り込まれていたという。一般公開された時点では、これらの文言は削除されたとブルームバーグは報じているし、筆者もそのような記述を見つけることはできなかった<sup>(5)</sup>。だが草案の段階では、大幅な宗教的価値観の転換が提起された可能性が指摘されているのである。現在公開されているプログラムでは、男女隔離や礼拝時間についてはすでに削除済みではある

---

#### 筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師、東京大学特任准教授などを経て現職。

著書に『現代サウディアラビアのジェンダーと権力』（福村出版、2011年）、『イスラーム世界のジェンダー秩序』（明石出版、2014年）、共著に『中東政治学』（有斐閣、2012年）、Higher Education Investment in the Arab States of the Gulf (Gerlach, 2016)、Arab Women's Activism and Socio-Political Transformation (Palgrave, 2018) など。共訳に『21世紀のサウジアラビア』（明石書店、2012年）など。専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

---

---

(2) Kingdom of Saudi Arabia. *KSA Vision 2030: Strategic Objectives and Vision Realization Programs*.

(3) Kingdom of Saudi Arabia. *National Transformation Program 2020*.

(4) Kingdom of Saudi Arabia. *Quality of Life Program 2020: Delivery Plan*.

(5) Nereim, Vivian. "Saudi Program Calls for Gender-Mixing, No Prayer Closure" *Bloomberg*. May 5, 2018.

<https://www.bloomberg.com/news/articles/2018-05-04/saudi-program-calls-for-gender-mixing-no-prayer-closure>

(最終閲覧日：2017年5月7日)

ものの、従来の社会・文化規範の転換を図るような内容は複数含まれている。たとえば従来、サウジアラビアでは、「ジェンダー平等」といえば、男女のあらゆる差異を認めないことであると理解する人も多く、国連女性差別撤廃条約に強く反発する層も存在した<sup>(6)</sup>。だが、計画のなかでは、国連開発計画のジェンダー平等に関する目標を2030年までに世界トップ水準にすると明示的に掲げているのである<sup>(7)</sup>。230ページ余りにおよぶ計画書には、数多くの図表が盛り込まれており、たとえば「ジェンダー平等」に関する記述も、チャートの中にさりげなく表現されているに過ぎない。斜め読みでは気づかないレベルだが、よく読むと抜本的改革を迫る内容があちこちに散りばめられているのである。

『生活の質向上プログラム2020』が目指す「住みやすい街」の指標には、経済誌『エコノミスト』の調査部門が毎年発表する、グローバル・リバビリティ・ランキングなど6指標を参照している。同計画の目的は、2030年までに少なくともサウジ国内の3都市を、世界でもっとも住みやすい都市上位100位入りを果たすことであるという。2016年には、グローバル・リバビリティ指標でリヤドが107位、ジェッダが111位、アル＝ホバルが118位であったので、具体的にはこれらの3都市の100位以内入りを目指しているのだろう。なお、『グローバル・リバビリティ報告書2017』では、過去5年間に順位を上げた都市の第1位にテヘラン、第2位にドバイが挙げられている。これら近隣の都市の変化のサウジアラビアへの影響も看過できない<sup>(8)</sup>。実際、『生活の質向上プログラム2020』にも、UAEをサウジのロールモデルのように位置付ける表現もある。たとえば前述の「ジェンダー平等」については、国連開発計画のジェンダー平等指標を2020年までにUAEのレベルを目指すと明記されている。

これらの目標達成のために掲げられた概念は、インフラと交通網の整備、住居・都市計画・環境の整備、ヘルスケアの向上、経済・教育機会の提供、文化と芸術活動、スポーツの促進などで、2020年までに国内に45の映画館を設置するほか、現在10ある公園とスタジアムを54に増やすといった意欲的な数値目標が掲げられている。だが、驚くのは付録に掲載された、各主要都市が達成すべき具体的な目標である。たとえばリヤドでは、エクストリーム・ポゴと呼ばれるホッピングを使ったストリート・スポーツや、パラグライダー、スカイダイビング、バンジージャンプなどが導入されるという。大人の男女が分け隔てなくこれらのスポーツが楽しめる日が、2020年には出現するということだろうか。

重点観光スポットも興味深い。たとえばリヤドでは、昨年11月に汚職撲滅の一環で拘束

---

(6) 辻上奈美江『現代サウディアラビアのジェンダーと権力』福村出版、2011年。

(7) *Quality of Life Program 2020*, p. 225.

(8) The Economist Intelligence Unit. *The Liveability Report 2017: A Free Overview*.  
[http://pages.eiu.com/rs/753-RIQ-438/images/Liveability\\_Free\\_Summary\\_2017.pdf](http://pages.eiu.com/rs/753-RIQ-438/images/Liveability_Free_Summary_2017.pdf)  
(最終閲覧日：2017年5月7日)



されたワリード・ビン・タラール王子のキングダム・センター・タワーがランドマーク建造物として指定されている。その他の観光スポットとともに、ガイド付きツアーが組まれる予定という。他方で、ジェッダについては、メッカのグランド・モスク、カアバ神殿、アラファト山など、宗教的スポットに案内付きツアーが組まれるとされている。サウジアラビアは、これまでの商用ビザや巡礼ビザに加えて観光ビザの発給を始めたが、これら宗教スポットについてはやはりムスリム限定ということだろうか。そうであれば、小巡礼などとはどのように差異化されるのだろうか。

目標は、それぞれの地域や都市の、文化的あるいは自然条件の特性を生かした内容となっているのだが、既存の観光資源を羅列したのみと読み取れるものや、過度に革新的でどのように実現するのかイメージしにくいものも含まれている。

## 映画館開設のインパクト

とはいえ、これらの改革の試みは「公共圏」の拡大に確実に寄与するだろう。ここでいう公共圏とは、ハーバーマスのいう対等な議論ができる時間や空間のみを指すのではなく、サウジ研究者であるアメリー・ル・ルナールが「知らない人々が出会うことができる空間」の生成をも意味する<sup>(9)</sup>。ル・ルナールは、新たな公共の空間が出現したことによって、サウジの若い女性たちは、自らが女性らしく、尊敬に値する立ち居振る舞いができているかどうかを確認する契機が生じたという。ル・ルナールは主にショッピングモールについて検討しているのだが、サウジアラビアにおけるショッピングモールの出現は、これまで私的空間にとどまることの多かった女性たちが、他者という鏡を通して自己を知ることができる機会を提供したことになる。そうすることによって、ジェンダー規範が強化されたり、再編されたりする契機をもたらしたとル・ルナールは論じる。ル・ルナールが著書を発表した2014年の段階では、このような空間は、彼女が着目したショッピングモールに限定されていた。だが今、その空間は、政府主導の取り組みによって着実に広がろうとしている。たとえば注目されている映画館の開設は、複数の観点から、見ず知らずの人々が出会う機会を提供していると考えられる。

その様子は、たとえばリヤドのアブドゥッラー王金融地区に4月18日にオープンしたAMCシネマに関して公開されている動画からも確認できる。AMCシネマのインスタグラム公式アカウントでは、映画館で男女のスタッフが同じチケット売り場で働き、売り場では男女の客がチケットを入手している様子をうかがうことができる。映画館のオープン初日に映画を鑑賞した女性ユーチューバーのラフィーフは、映画館に行く前後の道中を含

---

(9) Le Renard, Amélie. *A Society of Young Women: Opportunities of Place, Power and Reform in Saudi Arabia* (Stanford: Stanford University Press, 2014)

めて、克明に映画館の様子を撮影している。明るいピンク色のアバーヤをゆるやかにかぶっただけのラフィーフは、髪は隠していない。夫とともに真新しい映画館に入ると、初日のサービスとして映画館からポップコーンとドリンクが無料で提供された。映画開始直前にスクリーンに流れた宣伝では、ムハンマド皇太子がインタビューされている様子が映し出され、その後「サウジアラビアは世界の映画界に歴史を創り出す旅をしている」というメッセージが流れる。このメッセージは、『生活の質向上プログラム2020』でも、今後、映画館の設置に加えて映画産業の育成への意気込みが示されたことに呼応しているのだろう。だが、たとえば日本でも2013年末に公開されたサウジ人女性監督による映画「少女は自転車にのって」がサウジ国内では発禁扱いとなっていたことを考えると、短期間での大幅な方向転換と言える。AMCシネマでの上映作品は「ブラック・パンサー」であったが、映画上映後は、スタッフが会場の外で列をつくり、拍手で観客を送り出した。駐車スペースまで、映画館スタッフがゴルフカートで送ってくれるサービスもある。サウジ人の痒い所に手が届くサービスである。

ラフィーフは映画館での映画鑑賞に終始興奮した様子だったが、映画そのものは多くのサウジ人にとって新しいものではないと思われる。遅くとも2000年代初頭からビデオ販売店は存在していたし、近年ではホームシアターを設置している家庭もある。ホームシアターなどなくとも、個人宅ではテレビの有料チャンネルを契約していることが多いので、いつでも映画が見られる。おそらくサウジ人の多くは、一般的な日本人よりも有料チャンネルを通じて欧米の映画に慣れ親しんできた。流暢な英語を話すサウジ人の若い女性に、ある時、どこで英語を学んだのかたずねると、留学などしたことはないが、テレビで英語の映画をよく見ていると話してくれたことがある。

では何が新しいのか。先述の公共圏の観点からは、見ず知らずの人とともに映画を鑑賞し、喜怒哀楽を共有できる時間や空間が提供されたことであるだろう。ラフィーフは、映画鑑賞当日、極めてゆるやかに、しかも鮮やかなピンク色のアバーヤを着用していた。また、彼女はヘッドスカーフを着用していなかった。筆者が確認した動画のなかに髪を隠していた女性は見えたが、目以外の顔を隠すニカーブを着用した女性は見当たらなかった。ル・ルナールの議論を援用すれば、女性たちは映画館という空間で、新しい「女らしさ」や「的確な振る舞い」を創出しようとしていると言える。そのような試みを通じて、女性たちは従来のジェンダー規範の境界を交渉する社会的アクターとしての役割を果たしていることになる。だが同時に、あとで議論するように、公共圏の広がりや、逆に人々の分断を引き起こしている可能性もある。

## サウジ人の居住形態と公共圏

これらの変化は、政府主導の「改革」の名目のもとに上からもたらされたものであるが、

同時に、女性たちの間でも家庭が唯一の居場所ではなくなりつつある変化に呼応した動きと言えるかもしれない。そのひとつの指標になるのが、サウジ人の居住形態である。

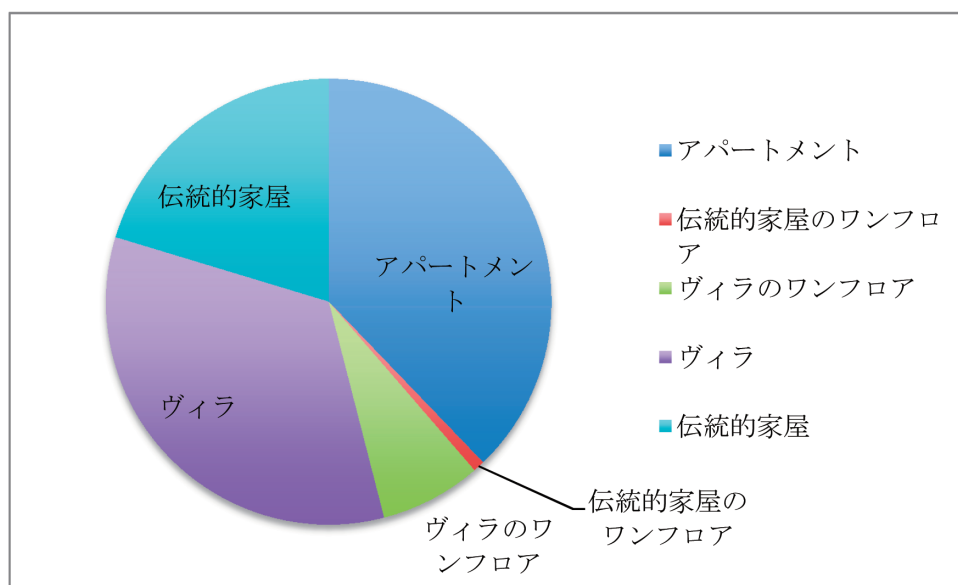
かつてサウジ人女性は、部外者から「家庭に閉じ込められたかわいそうな女性」というイメージを押し付けられることが多かった<sup>(10)</sup>。だが、このように女性を犠牲者とみなすことには問題もあった。というのも、サウジの家屋は一般的に日本の家屋よりはかなり広く、外出しなくとも過ごしやすい環境が整っている場合も多いからであった。おもに富裕層の女性たちが、カフェやレストランではなく、自宅で客をもてなすことを好んだのも、このような社会的条件ゆえであったと筆者は考えている。だが近年、特に若者の間で住居を購入することは困難になってきている。

サウジアラビア総合統計局が2017年に発表した『住居調査報告書2017 (Housing

表 1：サウジ人の居住形態

	アパートメント	伝統的家屋の ワンフロア	ヴィラの ワンフロア	ヴィラ	伝統的家屋	合 計
居住者人数	7,914,695	174,224	1,538,839	7,047,664	4,255,760	20,931,182
全体的に占める割合	38%	1%	7%	34%	20%	100%

図 1：サウジ人の居住形態



出典：General Authority for Statistics. Housing Survey 2017.より筆者作成

(10) たとえば以下の記事でも女性は家にとどまる傾向が強かったことが指摘されている。Dickinson, Elizabeth. “Amid a Saudi Purge, Women Face the Test of A Lifetime” *Foreign Policy*. November 7, 2017. <http://foreignpolicy.com/2017/11/07/amid-a-saudi-purge-women-face-the-test-of-a-lifetime-mohammed-bin-salman/> (最終閲覧日：2017年5月9日)

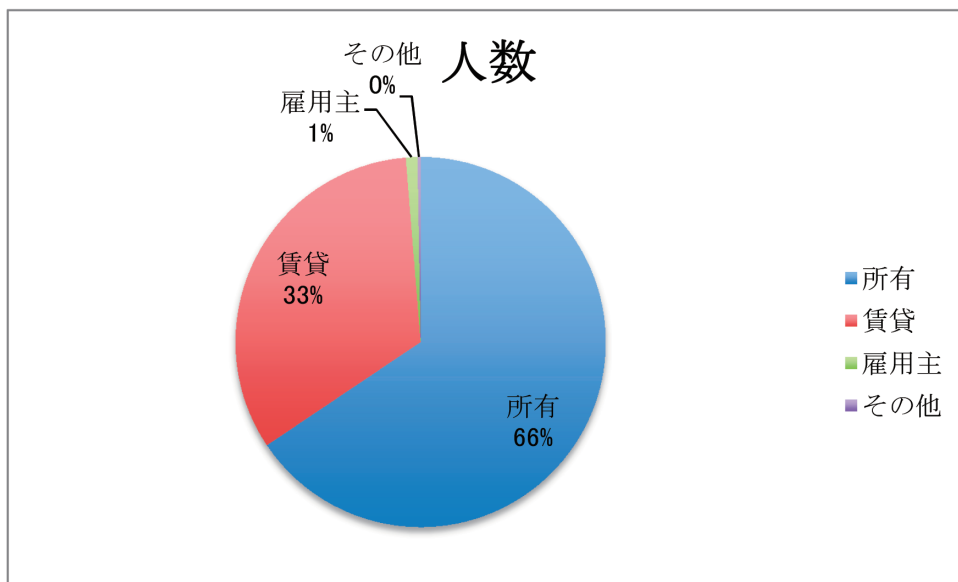
Survey 2017)』によると、アパートメントに居住するのは、サウジ人人口（約2,093万人）の38%、ヴィラと呼ばれる近代的戸建に居住するのが34%、伝統的家屋<sup>(1)</sup>が20%、ヴィラのワンフロアが7%、伝統的家屋のワンフロアが1%であった（表1および図1参照）<sup>(2)</sup>。

複数のサウジ人に確認したところによると、ヴィラとはリビングや台所、寝室などが機能別に独立している近代的な戸建の家屋を指す。これに対して、「伝統的家屋」も戸建ではあるが、ヴィラのように目的や機能別に独立した部屋で構成されておらず、その時々目的に応じて一つの空間が居間やダイニング、寝室などとして使用される、より伝統的な家屋を指す。そして、同統計によると、サウジ人の66%は居住する家屋を所有しているが、33%は賃貸の家屋、1%は雇用主が提供する家屋に居住しているとされる（表2および図2参照）。

表2：サウジ人の住居の所有／賃貸状況

	所有	賃貸	雇用主	その他	合計
人数	13,727,989	6,934,594	210,602	57,997	20,931,182
割合	66%	33%	1%	0%	100%

図2：サウジ人の住居の所有／賃貸状況



出典：General Authority for Statistics. Housing Survey 2017.より筆者作成

(1) アラビア語では *manzil sha'bi* と記載されており、「大衆的家屋」などと訳出するほうが本来の原語に近いが、意味の分かりやすさを優先し、ここでは便宜的に「伝統的家屋」とした。

(2) General Authority for Statistics. *Housing Survey 2017*.  
[https://www.stats.gov.sa/sites/default/files/housing\\_survey\\_2017.pdf](https://www.stats.gov.sa/sites/default/files/housing_survey_2017.pdf)  
 (最終閲覧日：2018年5月3日)



だが、所有／賃貸については、データによるばらつきがある。2016年6月に発表された『国家変革計画2020』では、住居を所有している家族の割合は47%にとどまっており、2020年の数値目標を52%に設定している<sup>(13)</sup>。

2012年に提出した修士論文でサウジ人の居住状況について詳しく調べたハイサム・アル＝フバシは、サウジ人の住居所有率をこれらのデータよりも低いと見ている。同論文によると、2011年段階でのサウジ人の住居所有割合は35%であり、86%のクウェートや90%のUAEとの比較では格段に所有率が低い<sup>(14)</sup>。しかし、同研究によれば、サウジ人は決して賃貸を好んでいるわけではない。アル＝フバシがインターネットで1,200人強を対象に行ったアンケート調査では、95%以上がマイホームを入手したいと考えている。また多くのサウジ人はアパートよりはヴィラでの居住を希望しているのだが、都市化による不動産価格の高騰のため、それらが実現できずにいるという。

たとえば、リヤドで「ごく一般的な広さ」に相当する300～400平米の一戸建て住宅の価格の中間値は、2010年に123万リヤル（32万8,000米ドル）、ジェッダでは154万リヤル（41万米ドル）であった<sup>(15)</sup>。だが、政府が提供する住宅ローンを借りるのは容易ではない。政府の住宅ローン融資機関である不動産開発基金（Real Estate Development Fund, REDF）の融資承認までにかかる時間は長く、長ければ18年間も待たなければならないという<sup>(16)</sup>。また、不動産価格の高騰により、マイホームの入手は多くの公務員や会社員にとって現実的でもない。先述の「ごく一般的な」リヤドの123万リヤルの一戸建ての家を購入するために、全体額の2割を頭金として支払い、残額を年率6%の金利で15年間返済する場合、月々の返済額は8,270リヤル（2,205米ドル）になるという。月収の36%を月々のローン返済に充てると試算すれば、月々22,972リヤル（6,125米ドル）の収入が必要となる。この額は、公務員俸給表の最高額よりも高い。

## 家庭外で形成されるネットワークと分断

ところで教育や労働の機会を通じて、サウジ人男女のネットワークには変化が生まれつつある。変化はとりわけ女性の間で顕著で、教育を受ける機会を得た女性たちは着実に家庭外で過ごす時間を増やし、結果として家族や親族を離れたネットワーク形成が可能になってきた<sup>(17)</sup>。

---

(13) *National Transformation Program 2020*. p. 58.

(14) Alhubashi, Haytham. *Housing Sector in Saudi Arabia: A Study of Challenges and Opportunities of Homeownership for the Middle and Low Income*. *Unpublished Master's Dissertation* (Universidad Politécnica de Cataluña, 2012), p. 13.

(15) *Housing Sector in Saudi Arabia*, p. 64.

(16) 『国家変革計画2020』では、2016年段階で15年の待機期間を5年に2020年までに短縮する計画が盛り込まれている（*National Transformation Program 2020*. p. 58. を参照した）。



従来、女性たちの集いの場は家庭に限定される傾向があった。筆者の経験では、女性たちが親族で集まる場合であっても、あるいは共通の関心を深めるいわゆる「サロン」のような目的でメンバー女性の家が提供される場合であっても、核家族以外の客人が招かれる際に使用されるのはヴィラタイプの家屋であることが多い。また、サウジ人が家族以外の異性と交流することは好まれないため、ヴィラタイプの家屋でなければ、友人や親族を容易に招待できない事情もある。

先述の住宅問題は、結果的に女性たちを家庭外に押し出す効果を有していたと思われる。学校教育で獲得した仲間や共通の趣味・関心でつながるネットワークは、家庭のみならず、ショッピングモール内外のカフェやレストランで強化・構築されることも例外的ではなくなっているのである。

だが、公共性の高い空間が増えることによって、すべての女性が家庭から解放されるというわけではないだろう。ショッピングモールに加えて、映画館の設置や各種文化・娯楽イベントの開催によって、都市に居住する女性たちが外出する機会は着実に増えている。だが同時に、これらが世代間格差、都市・地方間格差、そして階層間格差を内包していることも自明であるからだ。

## まとめにかえて

本稿では、サウジ政府による社会改革が、結果として「公共圏」拡大の効果を有していることを指摘した。だが、急激に変化する社会に置き去りにされているように見えるのが、いわゆる保守的な人々である。2017年末にジャーザーンのリゾートでコンサートが行われた際には、男女の「行き過ぎた」交流の様子がソーシャルメディアで流れたためイベントは中断され、その他のイベントもキャンセルされたという<sup>(18)</sup>。

ムハンマド皇太子が主導する社会改革によって、たしかに欧米的で近代的なライフスタイルを好む若者たちの閉塞感は打破されつつある。だが他方で、保守的な人々は今、声を上げにくい状況になっている。社会的・文化的価値観の転換を伴う変革は、別の閉塞感を生起させている可能性もある。「公共圏」の生成の裏側にある格差への配慮も、必要とされている視点ではないだろうか。

\*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。

---

(17) Tsujigami, Namie. Higher Education and Changing Aspirations of Women in Saudi Arabia, In Dale Eickelman and Rogaia Mustafa Abusharaf eds., *Higher Education Investment in the Arab States of the Gulf: Strategies for Excellence and Diversity*. Gerlach Press: 2016. pp. 42-54.

(18) “Saudi Arabia Shuts Down Resort, Cancels Events over “Wild” Mixed-Gender Beach Concert in South”, *The New Arab*. December 25, 2017.

<https://www.alaraby.co.uk/english/blog/2017/12/25/saudi-arabia-shuts-down-resort-over-wild-mixed-gender-concert>

(最終閲覧日：2018年5月10日)